

西の空が茜色に染まっていた。

公園のガス灯に、点灯夫が火を付けている。すぐに夜だ。だが、資料に目を通す分には、まだ十分に明るかった。公園のベンチに腰を据え、コナンはクラウドから渡された資料を読んだ。

無理を言っ引張り返り出して来てもらった、古い資料。

兄の殺害に関する記録だ。

「……………」

いまから三年前、兄は暴漢に襲われて命を落とした。犯人はいまもまだ捕まっていない。行きずりの暴力沙汰と見なされたため、ろくな捜査も行われていないのだ。特に珍しくもないケース。言わば「不幸な事故」として処理された形である。

とはいえ、警察を責めるつもりはなかった。コナンにせよ、心のどこかで兄が死んだのは「不幸な事故」だと思っていた。犯人への憎悪はあるが、そこに因縁があるなどは考えていなかった。いまも、兄の死に、偶然以外の「理由」があったとは思えずにいる。

実際、

「…………見落としていたこともない、か…………まあ、そうだよな」

読み終えた資料を脇に置き、コナンは空を仰いでため息を吐いた。

目を細くし、夕空を眺める。

もう一度、薄れつつある兄の記憶をなぞってみる。

幼い頃、コナンは両親と死に別れ、孤児院で暮らしていた。その孤児院は貧しく、また善意など欠片もないような場所だった。

コナンは十歳になるのを待たずに孤児院を飛び出し、頼る者もないまま、路上で暮らし始めた。盗み、騙し、脅し、逃げ、死と隣り合わせになりながら、綱渡りのような日々を生き抜いていた。

おそらく、あと半年も当時の生活が続いていれば、コナンは綱から転落し、死に捕らわれていただろう。しかし、コナンが十一になったとき、思いも寄らぬ救いの手が差し伸べられた。

それが、亡き兄、ジェームズ・ワトソンだ。

生き別れの兄がいたことを、コナンは彼に会うまで知らなかった。当然信用などしなかったし、心を許すつもりもなかった。

しかし、警戒心を解かない弟に、兄は優しく、根気強く付き合ってくれた。食べ物と住む場所を与え、まともな服を着せ、教育までしてくれた。歯を剥いて怒鳴り、罵り、反抗するコナ

ンに、絶えない微笑で応じてくれた。少年にとって、頼れる保護者で在り続けた。気がついたとき、兄はコナンにとって自慢の家族に、また人生最初の目標と言える人物になっていた。

その兄が、暴漢の手に掛かって落命した。

コナンが十八のときだ。

再び家族を失ったコナンは、絶望し、自棄的になった。しかし、再び独りになったコナンは、以前と同じ生活には戻らずに済んだ。兄の残した遺産が、彼から貧困を遠ざけてくれたからだ。そして、まともな生活を送れるだけの知恵と教養も、すでに彼の血肉となっていたのである。

死してなお、兄はコナンを守ってくれている。その事実気付いたコナンは、兄と同じ道を歩むことを決意する。すなわち、医者になると誓ったのだ。

コナンが猛勉強の末ロンドン大学に入学したのは、兄の死から二年後。革命暦九八年——去年のことだった。

兄の死によるショックは大きかった。しかし、彼が残してくれた資産と、彼が授けてくれた愛情で、乗り越えることができた。

そう、思っていた。先週、あの男に会うまでは。

あの、モリアーティと名乗る男に。

「……くそっ」

資料に記されている記録のほとんどは、幼かったコナン自身の証言だ。事件のショックで記憶があやふやなコナンにすれば、自分がこんな証言をしたことすら覚えていない。資料を読んだいまも、書かれていることには、ろくに現実味が持てなかった。

だが、

「モリアーティ……」

あの男の存在が、コナンの意識に波紋を生んだ。

兄の死には、あの男が関わっている。そして、事件に関わる登場人物は、コナン、兄、兄を殺した犯人の三人だけだ。

兄が殺されたとき、あの男は、その場にいた。

なら、あの男に当てはまる「役」はひとつしかない。

そして、その「役」を演じたのが、あの男なのだとすればーモリアーティが単なる「行きずりの暴漢」だったとは考えづらい。そこには必ず「理由」があったはずだ。

モリアーティが殺人を起こす「理由」。いみじくも、アーサーが口にしていたことだ。

『敵を殺害してきた』のが『ジャック』側だけはない

「……っ」

コナンは我知らず唇を噛む。

モリアーティはこれまでも、彼の敵を害して来たはずだ。

そして、彼の「敵」とはつまり……。

「兄さん……兄さんはまさか、《ジャック・ザ・ナイトメア》だったのか？」

思わず口にした瞬間、ぞくぞくと冷たい電流が背筋を流れた。

ステイプルトンの事件の際、ロジャーを包囲した仮面の集団が脳裏に甦る。あの集団には、男もいれば女もいた。おそらく、年齢も立場も違う、様々な人間がいたのだろう。

兄はかつて、あの中の一人だったのだろうか？ だから、敵対するモリアーティに殺されたのか？

そしていま、自分は兄の死とは全くの別件から、再びモリアーティに巡り会ったのだろうか？ 本当に？ そんなことが本当にあり得るだろうか？

わからない。自分は、理路整然と書かれているはずの医学書すら、満足に理解できないのだ。誰一人注目することのない三年前の殺人の真相など、自分に解けるわけがない。

断片的に垣間見える、まだら模様の、過去の記憶。このままでは駄目だ。絡まった紐を解くことはできない。

やはり、アーサーに相談しよう。コナンは空を仰いだまま、目を閉じ、決意した。しかし、そのときだった。

「ご名答です。コナン・ワトソン」

完全に不意を突かれた。ハッと我に返ったとき、ベンチに座るコナンの前に、一人の男が立っていた。

赤い落陽を浴びて、静かに、優雅に、佇む青年。

夜会服を着ていた。コナンは全身が凍り付く思いだった。同じだ。あの晩、ロジャー・ステイプルトンを――《解放者》の命を、いとも容易く奪い去った、仮面の男と同じ夜会服……。

「初めましてーでは、ありませんね。あの夜に一度、それに最近もミス・ハドソンを通じて参上しました。あの節は大変失礼致しました。改めて、お詫びします」

非の打ち所がない典雅な仕草で、青年は深く頭を垂れた。

コナンは、全身が麻痺したかのように動けない。ただ両目を見開いて、眼前の青年を凝視していた。

長い時間を挟み、辛うじて舌を動かして、喘ぐように言う。

「……お前は……」

「すでにご存じでしょう？ わたくしのことは――ジャック、とお呼び下さい」
「……………」

コナンはゆっくりと生唾を呑み込んだ。

ジャックと名乗った青年は、あるかなきかの微笑を湛えたまま、静かにこちらを見つめている。コナンは自分の脳味噌が石化したような気がしていた。笑いそうなくらい、頭が働かなかつた。

それでも、労働を拒否する頭の代わりに、もう一度舌を動かして、

「……ジャック？」

「はい」

「……《ジャック・ザ・ナイトメア》の、《ジャック》？」

「ええ」

短く益のないやり取りにも、青年は優雅な微笑を一切揺るがせない。

オーケー。

コナンは大きく息を吸い、吐いた。背筋を伸ばし、口元を引き締め、目に力を込めた。

全力で、目の前の青年――ジャックと向き合った。

武器になるような物を所持していないのが残念だ。だが、いざとなれば拳でも戦える。大声を出して助けを呼ぶことも、走って逃げることもだつてできる。《ジャック・ザ・ナイトメア》と一対一で対峙してしようと、できることは、ある。

たとえば――会話することだ。

「証拠は？」

尋ねると、青年は少しだけ笑みを深くし、懐から一枚の仮面を取り出した。

もはや見慣れた仮面だ。それでも、目の当たりにすると鼻白みそうになる。そんな自分を、密かに叱咤した。

「手に取って確認されますか？」

「……いや、いい。それより、要件を聞きたい。それとも、俺が気付いてないだけで、これは一種の『自首』なのか？」

「いえ。申し訳ありませんが」

「では、『殺害予告』？」

「とんでもない。実はお願いがあつて、参りました」

「お願い、ね。怖いな」

正直に答えつつ、「ただ」とコナンは会話の主導権を取る。

「先にこちらから確認したい。『名答』と言ったな？ それは、さっきの俺の独り言に対して言ったのか？」

「ええ、その通りです」

「つまり、兄さんは……死んだジェームズ・ワトソンは、お前たちの仲間だったということか？」

「はい」^{イエス}

ジャックは簡潔に回答した。

ぎりつ、とコナンは奥歯を噛み締めた。

「……それを証明できるのか？」

「その前に、ミスター・ワトソン。貴方は、ミスター・ホームズのご家族のことは何かご存じでしょうか？」

ピクツとコナンは眉を動かした。

ジャックがその質問をする意図がわからなかった。どこまで話しているのか——そもそもコナン自身、立ち入ったことまでは、あえて聞いていないのだ。

ただ、

「……政府の要職に就いている、ということは聞いている」

「ああ、なら大変結構です。話が早い。それでは、わたくしどものことを説明する前に、ひとつお教えしておきましょう。わたくしどもは、ホームズ家の部下なのです」

あまりに予期せぬ台詞だった。コナンは絶句し、しばらくの間、二の句を告げることができなかった。

衝撃が醒めやらぬまま、

「……なんだと?」

「もちろん、公の話ではありませんよ？ そもそも、ホームズ家が政府の要職——裏の要職にあること自体、公にはなっていませんからね。当然、その下で働くチームのひとつに過ぎないわたくしどものことも、表向きは『存在しない』ことになっています。わたくしども《ジャック・ザ・ナイトメア》は、言わば、政府の秘密部隊なのです」

「……………」

ようやく——辛うじて——理解が追いついてきた。

アーサーは実家とは折り合いが悪いらしく、家族のことも話したがらない。それでも、家族が政府の重要な仕事を請け負っていることは教えてくれたし、それがあまり大っぴらにできない類の仕事らしいということも、それとなく察することができた。

しかし……。

ロンドンを恐怖に陥れる殺人鬼の群れが、政府の秘密部隊？ あの《ジャック・ザ・ナイト

メア』が？ そんな荒唐無稽な話があるだろうか？

……いや。

「『シジャック・ザ・ナイトメア』というのは、単なる殺人鬼——殺人集団ではない」

「『シジャック』の連続殺人は、敵対する二つの組織の、抗争の片面なんだよ」

そうだ。アーサーが看破していたではないか。『シジャック・ザ・ナイトメア』はただの殺人集団ではなく、特定の「敵」に狙いを定めて標的にしている「組織」だと。

そしてその「敵」こそがモリアーティ一味——彼と、彼が催眠術で操る『解放者』たちなのだ。『シジャック・ザ・ナイトメア』とモリアーティ一味は、敵対し、抗争している、二つの組織なのである。

なら、その片方が政府の手の者だったとしても、理屈は通る。

「念のため申し上げておきますが、アーサー・ホームズはわたくしどものことを存じ上げないはずです。彼の家族は、『こうしたこと』に彼を巻き込むことを、極端に嫌っていますので」

「……だが、彼はすでに巻き込まれているぞ？」

「ええ。ですからご家族の方も、大変憂慮されているようですよ？ それに……存じ上げないとは申しましたが、そろそろ彼も、気付かれたのではないのでしょうか？ 凶らずも、彼はわたくしどもの『敵』がどれほど危険な存在か目の当たりにされたはず。『教授』と呼ばれる敵の首領はもちろん、彼によって組織された『解放者』たちが、このロンドンにどれほどの悪意を撒き散らしていることか。そして、彼のご家族が、そのような危険を放置するわけがないことぐらい、気付いて当然でしょうからね」

「……………」

確かに、モリアーティと接触して以来、アーサーは基本的に単独で調査を続けている。大っぴらにはできない事情——彼の家族が関わっている可能性を考慮しているのだとすれば、あんなに熱の入れ様も得心が行くというものだ。

アーサーは、『シジャック・ザ・ナイトメア』が政府側の組織だと察し、そこに自分の家族が関わっているかもしれないと考えて、ムネヲカケ 単身裏を取っているのだとすれば……。

ああ、とコナンは認めざるを得なかった。

十分にあり得る話だ。「説得力」がある。

「ただ、ご家族の方が憂慮されるのも当然だと思います。はっきり申し上げますが、『教授』は脅威だ。わたくしどもが何故あのような仮面を用いるか、ミスター・ワトソンはおわかりで

しょうか？」

「……彼と『目を合わせない』ため……彼の催眠術の対策だ、と」

「アーサー・ホームズの推理ですか？ さすがですね。仰る通り。《教授》プロフェッサーは自らの力を、《ギアス》と呼称しています。そして、彼の《ギアス》こそが、すべての根幹にあるのです。あの仮面が象徴する通り、わたくしども《ジャック・ザ・ナイトメア》は、まさに彼の《ギアス》に対抗すべく、政府によって訓練され、組織された部隊です。そして――貴方の兄、ジェームズ・ワトソンもまた、そうした『戦士』のひとりでした。わたくしどもの戦友だったのです」

どこか誇らしげにさえ聞こえる口調で、ジャックは堂々と語った。その様は、優雅でありつつ、猛々しく、不敵だ。コナンは自分が圧倒されるのを感じずにいられなかった。

「……待ってくれ。《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行が噂になったのは、今年の春先頃からだ。兄が死んだのは、三年前だぞ？」

「わたくしどもと《教授》プロフェッサー陣営との暗闘は、もっと以前から始まっていました。というより、ジェームズ・ワトソンこそが、彼らとの戦いにおける最初の犠牲者なのです」

「そんな……」

「モリアーティはロンドンに巢を張る毒蜘蛛です。ジェームズ・ワトソンは蜘蛛の毒を受け、亡き者となりました。ですが、仇は討ちます。今年に入ってからようやく、彼らを殲滅する目処が付きました。だからわたくしどもは、『仮面を残す』ことで『宣戦布告』したのですよ。戦いは継続中ですが、決着は間もなくでしょう。無論、わたくしどもが勝利します」

ジャックはきつぱりと宣言した。コナンは為す術もなく、ジャックを見つめていた。頭の芯が痺れている。

いま自分は正常な判断を下せる状態にない。が、それでも逃げ出すわけにはいかなかった。コナンは踏み留まり、会話を続ける。それが、いま自分にできる唯一のことだ。

「……『お願い』があつて、来たと言ったな。お前の――お前の望みは、なんだ？」
目を逸らさずに、コナンは問いかける。

真つ直ぐなコナンの眼差しを、ジャックは静かに受け止めていた。まるで、コナンの何かを量るかのよう。

そして、

「貴方をスカウトに来ました。部隊としての判断ではなく、あくまで、わたくし個人の感傷です」

やはり。

コナンは意識して深呼吸を繰り返した。

「……感傷ってことは、兄の件があるからか？」

「ええ。彼がそれを望んだかどうかはわかりませんが、わたしは、彼の仇を討つとすれば、貴方が相応しいと思いましたから」

感傷と口にする割りに、ジャックは明日の天気でも話すように、ごく平淡な口振りで言った。

兄が望むかどうかなら、コナンは即答できる。兄は仇討ちなど、望まないだろう。コナンがそれを実行するなど、論外なはずだ。

だが……自分はどうだ？ コナン自身の本音は？

兄の仇が討てるなら……この手で討つべきではないか？ 討ちたいと思わないのか？

「いまずぐ返事を、とは申しません。今日の所は、これにて退散します。ただ、先ほども申し上げましたが、決戦は近い。どうか悔い無き決断を」

「……………」

「ああ、それから、このことはアーサー・ホームズにはご内密にお願いします。彼のご家族に怒られてしまいますし、それ以前に、彼が知れば、自ら危険に身を晒しかねない。ご家族の方々が懸念されている通り、この件に関して言えば、彼の無垢な好奇心は、あまりにも危険過ぎますから」

そう言うと、ジャックは胸に手を当て、深く、優雅に、頭を下げた。

そして、なんの警戒もしないまま、軽やかに背中を向けた。

散歩を再開したような軽い足取りで立ち去るジャックを、コナンは声をかけることもできないまま、黙って見送る。

ただ、

「ああ、そうでした。ロイロット博士の件ですが、彼の妻に、彼女が見つけた物を見せるよう、仰ってみてください。貴方と貴方の相棒がいかに危うい橋を渡っているのか、はつきりするはずです」

「なっーお、おいっ！ なんで、そのことを」

コナンが思わずベンチから立ち上がったが、ジャックは足を止めなかった。その足取りを乱すことなく、公園から歩み去った。

気がつけば太陽は没し、辺りはガスの灯の明かりで、仄かに照らされている。残されたコナンは、ジャックが去った方角を、険しい面持ちでにらみ続けていた。

*

コナンがベーカー街222Bに戻ると、出迎えたのはまたしても銀助だった。

「アーサーは？」

と尋ねるコナンに、銀助は肩を竦めて、

「帰って早々、部屋に閉じこもってますよ。その暖炉擬きはずっとグオングオン唸ってますし、部屋からはバチンバチンと不穏な音が聞こえます。本当に勘弁して……あれ？ コナン君？ 何かあったんですか？」

うんざりと答えていた銀助が、途中で急に声音を変えた。

コナンは首を横に振る。

『君』は止めてくれ。それに、なんだ？ 別に、何もない」

「そうですか？ でも、なんだか顔色が悪い気が……」

「……気のせいだ」

思いの外勤の良い銀助の視線を避けながら、コナンはコートを脱いでコート掛けにかける。帰路で平静さを取り戻したつもりだったが、ジャックの投げかけた動揺は尾を曳いているらしい。

正直、自分はまだ混乱している。無理もない。あまりにも突然に、また立て続けに、衝撃を受け過ぎた。ただ、あの男のもたらした衝撃を、コナンの日常であるベーカー街には持ち込みにたくない。

落ち着け、とコナンは自らに言い聞かせ、気付かれぬよう呼吸を整える。

大きく息を吸い――

「アーサー君いる！？ ロイロット博士が何者かわかった――あれ、コナン君、どうしたの？」

「ど、どうしたもこうしたも、あるかっ！ ノック！ それから、『君』は止せっ！」

激しく咳き込みながら、コナンはドアを吹き飛ばす勢いで飛び込んで来たマリーに抗議する。

マリーは「あ、ゴメン」と謝ったが、次の瞬間には元のテンションに戻っていた。

「そんなことより、ロイロット博士よ！ ヘレンさんは学者って言ってたけど――まあ、実際、学者には違いなんだけど、彼は……って、あれ？ ねえ？ なんだか、良い匂いしない？」

勢い込んで喋り始めたかと思うと、マリーは突然目をぱちくりとし、くんくんと行儀悪く鼻を動かした。

乙女らしからぬ傍若無人ぶりにコナンが苦々しく顔をしかめる一方、銀助も「そう言えば――」と匂いを嗅ぐ仕草をする。

すると、リビングのもうひとつのドアが、ギイイ、と軋みながらゆっくり開いた。

現れたのは黒眼鏡を掛けた、仏頂面のアーサーだ。

しかも、その手には大皿を抱えている。載っているのは、ほかほかと湯気を立てる、巨大な――下手をすると十ポンドはありそうなローストビーフだ。はつきり言って、これぐらい奇天

烈な組み合わせもないだろう。

「……ア、アーサー？ どうしたんだ、それ？」

コナンが唾然と尋ねたが、アーサーは聞こえなかった様子で無反応にリビングに入って来た。中央のテーブルに下カッと大皿を置き、黒眼鏡を外す。それから、先が二股に分かれたカービング・フォークを、ブスリ、と巨大な肉の塊に突き立てた。

「……わからん」

「いや、それはこっちの台詞なんだが」

呆れて言ったが、それもアーサーの耳には入らなかったらしい。アーサーは今度はカービング・ナイフを取り出し、巨大な肉塊をズブズブと切り分け始める。

「……やはりな。中はまだ生焼けだ。これではせいぜい火傷程度……ああ、そうか。体調を崩し、身体に痛み……熱にうなされたんだったな。クソッ。出力は劣らないはずだ。何が足りない」

切り分けたローストビーフの断面をにらみながら、アーサーは椅子に座り込み、ぶつぶつと陰気にぼやく。日頃の行いからなる先入観を捨てたとしても、これほど異様な相棒の様子は初めて見る。銀助は肉塊に目を白黒させているし、マリーなどこれでもかと眉間に深い深い皺を寄せていた。

「……アーサー？ 念のため確認するが、それはまさか、ひよつとすると、昼間言ってた『密室殺人の実験』結果なのか？」

「……あ、コナン。なんだ。帰ってたのか」

「……ただいま」

なんだか、ジャックのことなど、どうでもよくなりそうな気分だ。そう言えば今日は昼食も取っていない。豪快なローストビーフのにおいに釣られ、不覚にもコナンの胃が音を鳴らした。

他方、マリーは我に返ったようで、

「そうだ！ アーサー君。ロイロット博士のこと、少しわかったよ。あの人、サクラダイトの研究家なのね？」

マリーの台詞に、コナンと銀助が鋭く反応して目を剥いた。

一方アーサーは平然と首肯する。

「その通り。本邦で最初に、科学的視点からサクラダイトの可能性に着目した、第一人者だ」

「でも、イギリスじゃあ爪弾きにされてる、学会の異端児みたいよ？ 人付き合いの悪い変人だって評判みたい」

「知ってる。愚かなことだ。彼の才能を拒否するなど、我が国の科学と知性の、大いなる損失だよ。だから彼は、神聖ブリタニア帝国に留学したんだ。ブリタニアは電気工学を始め、サク

ラダイトの研究でも世界で突出しているからな。実際、彼の論文の多くは、留学先で発表されたものだ。特に、電磁波の分野で先進的な発見を重ね、その成果は軍事研究にも活かされている。あちらでは、サクラダイト研究で名を成したディゼル家とも昵懇の間柄らしい」

ぶすつとした表情のまま、それでもアーサーは熱く語った。

アーサーが最初からこの件に乗り気だった理由がわかった。彼は「発明家」を自称しているが、その発明の多くはサクラダイトを利用した電化製品だ。要するに彼は、サクラダイト研究者であるロイロット博士の「ファン」だったのだろう。

アーサーはローストビーフをナイフでつつきつつ、

「ピッチャード・ロイロット博士が発表した論文の中に、彼が『マイクロ波』と名付けた電磁波に関するものがある。実を言うと、このマイクロ波を、一定の条件を満たした上で大規模に展開すれば、密室の中にいる対象を外から焼死させることも可能はずなんだ」

どこか拗ねたような態度のまま、アーサーはとんでもないことを言った。

「なつほ、本当か？　なんだ、そのマイクロ波というのは？」

「だから、電磁波の一種だよ。波長域の短い電波だ。直進性が強く、通信やレーダー——探査装置などへの利用が模索されている。まあ、まだ実用には至っていないがね？」

ただ、このマイクロ波の研究過程で、偶然面白い作用が発見されていてな。マイクロ波を当てることで、物質を加熱することができるんだ。また、反射を利用して電波を一点に集中させて、威力を増幅させることもできる。この原理を利用して、ロイロット博士はある実験を成功させた」

「ある実験？」

「冷めた紅茶を温め直した」

「……ジョークか？」

「バカ。従来の方法で熱を加えずにだぞ？　マイクロ波は水をーもつと言えば対象に含まれる『水分』を直接加熱するんだ。それも、急激に」

「……何が凄いかよくわからんが、それになんの意味があるんだ？」

「人体の六十パーセントは水で出来ている」

あっさりと言ったアーサーの台詞に、コナンはギクリと身を竦ませる。これでも医者卵の卵だ。それぐらいの知識はあったが、いまの文脈で告げられると鳥肌が立った。

「もちろん、マイクロ波を当てると人体の水分が熱されて死に至るなんて単純な話じゃない。ただ、マイクロ波は金属に当たると、一部は吸収されるが、残りのほとんどは反射する。たとえば、鉄で密閉した箱に一箇所だけ穴を開けてマイクロ波を放射すれば、中で幾度も反射を繰り返すんだ。だから、この反射確度を計算し、ある一点ですべてのマイクロ波が重なるよう調

整すれば、非常な高温を作り出すことも可能なはずなのさ」

「鉄で密閉した箱に、一箇所だけ穴一つつまり、窓か！ それ……」

「あの小屋そのものじゃない！」

コナンとマリイが青ざめる。

しかし、アーサーは首を振った。

「僕もそう考えた。窓が閉まっていたとしても、マイクロ派はガラスにはほとんど吸収されずに通過するからな。鉄柵も、あの間隔なら隙間から十分に放射できるだろう。だが……実際に実験してみてもわかったが、条件はかなりシビアだ。湯を沸かすのは難しくなかったが、これが人体となると……マイクロ波による加熱は赤外線と違い、対象の内部から加熱する。けど、人ひとり丸焼けにするのは、さすがに……どうしても芯までは浸透しない。第一、これは焼身自殺だ。マイクロ波を当てて発火させるとすると、いくら水分子を振動させたところで……いや待てよ？ 人体以外ならどうだ？ 衣服、毛布、シーツ……ベッドの木材に含まれる炭素に反応したのか？ にしても、多少焦げるならともかく、火が付いて燃えるものか？」

アーサーはまた周囲を無視して、ぶつぶつとつぶやき始めた。どうやら、目の前のローストビーフは実験の結果らしいが……何に「見立てた」のか、コナンはあえて聞かなかった。

「で、でも、アーサー君？ 私、学術系に強い新聞社の先輩にも聞いてきたし、資料も漁ってきたけど、ロイロット博士の研究で、そんな内容のもの見つからなかったわよ？」

「……一般に出回っている情報ではないからな。彼の研究の多くは、軍事機密に関わるものだ。

民間にまで降りてくるのは、当分先——下手をすると、このまま闇に葬られることだって十分あり得る」

「じゃあ、なんでアーサー君が知ってるのよ？」

「それは……いいだろ、別に。ツテがあるんだ」

アーサーはむすつと言葉を濁したが、コナンはピンと来た。

政府の裏の要職にあるという、彼の家族。アーサーは、そのルートを通じてロイロット博士の情報を得ていたのではないだろうか。

「……はあ。正直お話がよくわかりませんが……軍事機密に関わる研究をしていたような方が、どうしていまはイギリスで隠居してるんでしょう？」

その台詞は銀助だった。率直に疑問に思っただけのようだが、言われてみれば不自然だ。

しかし、アーサーはその理由も知っていた。

「ミセス・ヘレンだよ」

「え？」

「ロイロット博士はブリタニアで、同じく留学してきたミセス・ヘレンと出会った。年の差を

超えた大恋愛の末、博士はあちらでの立場をなげうって、彼女と共にイギリスに帰国し、結婚している」

「えええ〜!?」

仰天して声を上げたのはマリーだったが、思わず叫びそうになったのはコナンも同じだ。

「あ、あの二人に、そんな過去が」

「……意外だ。とてもそんな風には……」

啞然とする二人を余所に、アーサーはどうでも良さそうに肩を竦める。

「イギリスに戻ってからも研究は続けているし、ブリタニアの学会ーというより、ディゼル家との繋がりはいまでもあるみたいだがね。それでも、研究者としては……向こうに残った方が、彼のためになった気はするな。本来なら科学史に名を残して然るべき人物だ」

アーサーはそう評価して、口をへの字に曲げた。

科学者としての名声が、ピッチャードの幸福を保証したかはわからない。ただ、少なくとも殺人疑惑を向けられるようなことにはなっていないなかっただろう。何より、栄光を捨てて選んだ結果が昼間見た夫妻の姿だとすれば、自業自得とは言え、やるせない気がした。

マリーの眼鏡が下にずれ、露骨に幻滅した顔になる。

「わからないものね。そんなドラマチックに結ばれた二人なのに、熱が冷めたあとは、若い助手と浮気なんて……ああでも、大恋愛だったからこそ、こんな事件に発展したってことも……」

「おいっ。口を慎め、マリー。それは怪しいってだけで、決まったわけじゃないだろ？」

慌てて釘を刺すコナンに、「それがさあ？」とマリーは、失望が三、ゴシツプ好きが七といった顔で、わざとらしく声を潜めた。

「さっき言った、学術系に強いうちの記者、博士の助手と面識があったんだって。彼ーパーマーさんは、博士の代わりによくシティに出向いてたそうなの。で、ヘレンさんと一緒のところも、何回か見てるんだって！ それも、仲睦まじく歩いてるところを！」

「そ、それは……」

「結構な色男だったみたいよ？ 男のくせにアクセサリーじゃらじゃら付けちゃって。ヘレンさんの方も嫌がるどころか、派手な首飾りとかプレゼントしてたみたいなの！」

マリーは身を乗り出して、鼻息を荒くする。「ああ」とコナンも、クラスに探してもらった資料のことを思い出した。

「それなら俺も知ってる。パーマーは死んだときも、その首飾りを付けていたらしい。焼け跡に残骸が残っていたそうー」

「コナン！」

突然アーサーが叫んだ。コナンとマリー、それに横で話を聞いていた銀助まで、ぎよつとし

てアーサーを見た。

アーサーは食い入るような眼差しでコナンを見つめ、

「首飾り？ それは確かか？ 材質は？」

「な、何で出来てたかまでは……ほら、これ。お前に頼まれた、パーマーの焼死の記録だ。レストレード警部が貸し出してくれた。最後のページに、焼けた装飾品のスケッチが……」

コナンが差し出した資料を、アーサーは素早くかすめ取って、舐めるように凝視した。

「……金属製……それにこの形状……これなら、ひよっとして……！」

アーサーは熱の籠もる声でささやいたのち、椅子を倒して立ち上がり、資料を握り締めたまま自室に飛び込んで行った。

ボタンツ、トリビングとアーサーの部屋を結ぶドアが閉まる。コナンとマリー、銀助は、言葉もなく閉ざされたドアを見つめた。

たっぷり十秒以上過ぎたあと、

「……首飾りが、どうかしたわけ？」

「……さあ？」

マリーとコナンは顔を見合わせ、互いの困惑を確認し合った。

銀助が恐る恐る、

「このお肉、食べてもいいんでしょうか？」

*